

或る男と女の間には 44 人の子供がいてすべてが男の子だった。45 番目の子供は女の子のおちびさんだった。両親は女の子を寝台の下に隠しておいた。子供たちは大きくなり、両親は亡くなった。彼らは皆で働き、仕事の合間に料理を作らねばならず、それから仕事に戻ったが彼らにはそれがとても大変だった。

或る日、彼らが帰ると 44 枚の皿と食器がテーブルに揃っていて、彼らは食事をしてから仕事に戻ったが、誰がそんなことをしたのか尋ね合った。夜になって彼らが仕事から戻ると、またテーブルがしつらえてあるのを見つけたが、食事を作っていたのは彼女の妹だった。

或る日兄弟たちは、彼らの恩人が誰なのかを調べるために残ることを決めた。2 人の兄弟が残って家の中に隠れていると、女の子を見つけた。彼女は兄弟たちのことを知らずにいつものように自分の仕事をした。彼らは彼女を捕まえて一体誰なのかと尋ねた。彼女は、自分がおちびさんだから彼らには必要ないので放してくれるよう頼んでから言った：「あなたたちが私を寝台の下に捨てたんですから」。兄弟はそんなことは全く知らないと答え、他の兄弟たちが戻るのを待つことにした。他の兄弟たちが戻って皆で相談した。

彼らの家はとても清潔に保たれており、王宮の近くにあった。或る日、スルタンは雇い人のひとりに近くのココヤシの実を採ってくるよう命じた。その男はココヤシの木に登ったが、女の子の美しさに見とれて落ちて死んでしまった。2 人目の雇い人も同じように死んでしまった。3 人目の男は木にしがみつく冷静さを持ち合わせていた。彼は最初の 2 人が何故命を落としたのかがわかった。彼はスルタンに事情を報告した。しかしスルタンはその家に入り込む権利がなかった。スルタンはそこで生活している 44 人の男たちのことが怖かったからである。

彼は、女の子に結婚を申し込むために近づくことを老婆のココ・フィティナに任せた。老婆はその家に赴いて女の子と話し合ったが彼女は断った。スルタンは仕返しをするために傭兵を遣わした。傭兵は家に入り込み 44 人の子供の部屋に入った。妹の寝台は真ん中にあった。傭兵は 44 本の針を持って寝台の下に隠れ、女の子を刺した。彼女は叫び声を上げて兄弟たちに言った：「兄さんたち、蚤にかまれた」。ひとりの兄が彼女に言った：「僕の寝台においで」。傭兵はまた針で彼女を刺し、結局は 44 人の寝台を全部回るようになった。

朝になって兄弟たちは妹があちこち刺されているのを見て驚いた。家には蚤などいなかったからである。彼らは町を離れることを決めた。スルタンはこうやって目的を果たしたのだった。

道の途中で彼らは老婆に会い、彼女は言った：「子供たち、どこへ行くんだい。この先で 2 つの道にぶつかる。見通しのいい道と、曲がりくねって汚い道だ。曲がりくねって汚い道の方を進みなさい」。44 人の兄弟は汚い道を進むのを断ったが、妹はまともな道を進む方を断って言った：「私はおばあさんの忠告に従います。だって知恵のあるお年寄りですから」。彼らはそうやった別れ、44 人の兄弟は一方へ、妹は違う方に進んだ。

さて妹は曲がりくねった道を進んだので、兄弟たちと違って難を逃れた。と言うのも、見通しのいい道には魔法使いの老婆が住んでいて、水に毒を流して通りがかりの人間を皆殺しにし、その死体を溜池に投げ込んでいたのだった。

娘は道を歩き続けで或る村で立ち止まった。或る人が彼女を見てスルタンのところに会いに行き、村に美しい女性がいると告げた。人々は彼女を探してスルタンの許に連れて行った。スルタンは彼女に問いかけたが彼女は答えなかった。この侮辱に対してスルタンは結婚することを申し出、彼女はそれを受けた。

彼女は子を宿して生んだがそれでも黙っていた。子供は大きくなり、或る日父親が彼に言った：「息子よ、お前の母親と結婚してから随分時経ったが、私は彼女が話しているのを聞いたことがない。彼女を怒らせて話すかどうか試してくれないか」。そこで子供は、母親が食事を用意する度に、ココナツや米をひっくり返したが彼女は黙ってやり直すのだった。

或る日彼はロープを取って首に巻き、窓際に近づいて言った：「母さん、僕は死にます」。彼女は何も言わなかったので彼は続けて言った「母さん、僕は死にます。鼠みたいに、猫みたいに」。そこで彼女は答えた：「鼠みたいに、猫みたいに死ねばいいわ。私の勇敢な44人の兄さんたちが鼠や猫みたいに死んだように」。子供はそれを聞いて、そっとロープをはずした。彼は、母親が大事に思っていた44人の兄がいたことを知った。彼は、旅に出るのでお菓子とお茶を用意してくれるよう母親に頼んだ。彼女は手を振って応じたが何も言わなかった。

子供はいい道の方を進み、彼に呪いをかけようとしていた老婆に会った。彼女は言った：「止まりなさい。私には身寄りがいないのだけれど、ここで私と一緒に住まないかい」。彼は承諾して彼女と一緒に住み、老婆はとうとう子供を信用するようになった。彼女は子供に言った：「いいかい、私は死んだ者たちを生き返らせることが出来る。この水を振り掛けるだけでそいつらは蘇るけれどやっちはいけないよ」。子供は頷いた。

或る日彼は老婆に言った：「小屋を直すのに木を取りに森に行かなくてははいけません。でも出かける前に知っておきたいことがひとつあります。何しろ森の中に入るのだから、もしおばあさんが途中で死んだら、身寄りがないのでおばあさんの遺体をどうしたらいいでしょう」。彼女は答えた：「私は不死身なんだよ。私を殺すただひとつの方法は、このサゴヤシの実のひとつを砕くことだ。ひとつには私の魂が入っていて、もうひとつには秘薬が入っている」。

彼は朝とても早く起きてから短刀を取った。道すがら彼は短刀を忘れたふりをして、彼の方が若いので家に探しに行くと言出し出て、急いで戻った。家に着くと彼はサゴヤシの実のひとつを取って砕いた。老婆は叫び声を上げて死んでしまった。彼は水を取り、溜池に注いで伯父たちを蘇らせた。彼は伯父たちを溜池から出して素性を明かし、事情を話して母親がまったく話さないことを教えた。

彼らが村に行くときすべての人は、スルタンの息子がこんなに大勢の人間を連れていたのを見て驚いた。彼は叫んだ：「お母さん、こっちを見て」。沈黙。彼はもう一度繰り返した：「お母さん、お願いだからこっちを見て。窓まで来て」。彼女は答えた：「お前が私の 44 人の勇者たちを連れて来たとしてもお前のことなんか見ませんよ。その話はもうやめなさい」。彼女は懇願したが、彼女が話すのをスルタンが聞いたのはそれが最初だった。彼女は窓に近づき兄たちを見た。彼女は話し始め、喜びの涙を流し、取り戻された幸福が祝われた。彼らは皆で幸せに過ごした。